

不登校

子どもの理解と親の対応ー未然防止のためにー

佐々木正美（児童精神科医）

1. 思春期にいたる前の子ども

■ 幼児の遊び・ごっこ遊び

はじめに、旧ソビエトの心理学者ヴィゴツキーたちが観察した子どもの遊びのようすを紹介しましょう。

学齢近くの幼児が10人余り町外れの広場で「電車ごっこ」をすることになり、長い綱で輪を作りました。A君が、「ぼくが、運転手をする」と言うと、子どもたちは、いっせいにA君を見ましたが、文句を言う子はなく、A君は運転手になりました。A君は、ほかの子どもよりも知恵や腕力があり、リーダー的で仲間から一目置かれているようでした。

次いで、あまり間を置かずにB君が、「ぼくが、車掌をやりたい」と言い出しました。ところが、今度は、C君とD君が自分たちも車掌をやりたいと言い出しました。そこで子どもたちは、口々にだれが車掌に適任であるか名前をあげました。しかし結論が出ないようで、三人でくじを引くことになり、その結果、B君が車掌をすることに決まりました。

車掌が決まると、すぐ、C君が、「自分は駅長になりたい」と言い出しました。すると運転手をやるといっていたA君が、「運転手と駅長と、どっちが偉いか」と、少し不安そうに聞きました。

みんなは、また、それぞれ自分の意見を出し合いました。なかにはA君に媚びるように、運転手の方が偉いと言う子もいました。しかし、いつまでたっても

結論は出ないまま、電車ごっこが始まろうとしました。ところが、今度は、D君が急に「家に帰る」と言って帰ってしまい、やがて、すぐに紙袋をさげて戻ってきました。紙袋の中には母親の手作りの小さなクッキーがたくさん入っており、D君は、「ぼくはレストランをやるが、運転手、車掌、駅長は電車を走らせなければならないから、レストランに来てはいけない」と言いました。

■大人への憧れ、自由と責任

そこで、ちょっとした騒ぎになりましたが、結局、運転手と車掌に交代要員をつくり、非番の時にはレストランに行くことができるように約束を決めました。また、何人かでクッキーを食べてしまうといけないので、一人二個までとする配給制にしてチケットを配ることにしました。

いよいよ電車ごっこが始まりました。お客になる子どもたちを見ていますと、驚いたことに、子どもたちは、誰ひとりとして子どものまま乗客になった子はいなかったのです。ある子が、「ぼくは、宇宙飛行士だ」と言うと、他の子どもたちも次々と町長や動物園長、幼稚園長、図書館長、医者、郵便局長、自分の父親などになりました。やがて子どもたちの電車は、その町のVIP（重要人物）を多く乗せて走り出しました。子どもたちは、自分で選んだ職業や大人たちの振舞いを真似して、胸を張り、あらたまった言葉遣いをして、電車ごっこを楽しんでいました。

- ・キップ売りを兼ねる駅長はキップ売り場や改札口をみだりに離れてはならない。
- ・運転手や車掌は非番の時しか持ち場を離れたりレストランに行ったりすることは許されない。
- ・レストランの係といっても、客よりクッキーをたくさん食べることはできないし、客の接待に専念しなければならない。
- ・遊びの最中に気分が悪くなった仲間が出れば、医者を演じる子が面倒をみなければならない。

子どもたちは、それぞれ自分が受けもった役割や行動のルールに従って「電車ごっこ」をしていました。子どもたちは、自由と責任について、いつもこの

ように背中合わせの関係にあることを、遊びのなかで学んでいたのです。

■ルール、役割、モラル

子どもの遊びを見ていると、やりたいことを勝手気ままにやりたい放題にやっているように見えますが、そうではありません。また、ただ単におもしろいからというわけではなく、むしろルールに従うことで自分の身勝手を抑えています。

ビイゴツキーによると、子どもは活動を規制されるほど、遊びはそれだけ緊張した雰囲気をもたらして、「できた」とか「やってよかった」という気持ちを大きくするというわけです。仲間との目的やルールのない遊びには感動がなく、子どもの気持ちを満たしているとはいえません。

子どもは、外にすることがないからといって遊んでいるわけではないのです。もし、しかたなく遊んでいるというような子どもがいるとしたら、不幸な子どもといえます。子どもは、ルールを守り役割を分担し合って遊ぶことで、互いに共感と感動を体験し、自分のしていることがどうなのかを学ぶのです。自分の言動が、仲間たちと決めたルールから外れていないか、子どもは遊びを通して自分自身を見つめているのです。

■学童期、子どもは仲間から学ぶ



幼児期の終わりまでに、このようなルールや役割分担のある「ごっこ遊び」の類を豊富に体験しなければ、子どもの心に「よりよく生きていくこと」「責任感」「きまりを守ること」といった感じかたや思いは育ちにくいのではないかと思います。

子どもにとっての遊びは、絶えず新しく「やりたいこと」や「作り出していくこと」を発展させるとともに、「やりたいこと」の抑え方も身につけるための欠くことのできない機会でしょう。

ピアジェは、「子どもは、遊びの中で、さらに新しい遊びを作り出す」として、遊びは、ものごとを作り出す力になると考え、ビイゴツキーは「子どもが自分のわがままを抑える最大の力は遊びの中で生まれる。遊びの中で、将来、どう生きたらよいかという思いが生まれる」と指摘しています。

小学校時代の子どもが、集団へのなじみ方を学びながら、社会的な人間となるためには、何事でもよいから、できるだけ多くのことを友達から学ぶことと、自分が体験しているものを、同じように友達に分かち与えることが必要です。これは、アメリカの精神分析家エリクソンによってなされた指摘でもあります。子どもが、大人や親や先生から、日々学ぶということの大切さは言うまでもありません。しかし、「友から学び、友に教える」ということなしに、子どもが学校や一般社会で生きていく力を発達させることはできないというエリクソンの教えは、学校不適応の子どもが増えている今日、私たちはしっかりと受け止めなければなりません。

現代の子どもを見ると、大人からばかり教えられ、育てられており、子どもたち同士で教え合い育ち合う機会がなさ過ぎるようです。小学生時代の子どもは、できるだけ多くの友達仲間と、笑ったり、泣いたり、喜んだりしながら育たなければ、次の段階である思春期への心の準備ができたとはいえません。

小学生時代は、あまり友達を選ぶことをしないで、さまざまな姿をもった仲間から、いろいろなことを教えられ、また自分のもっているものをありったけ仲間に分かち与えることができ初めて生き生きと輝いていられるのです。

育ち盛りの子どもの体にとって、食物の質よりむしろ量が必要なように、心の働きや人間的な発達には十分な量の人間関係が必要です。それも友達や仲間との人間関係の量が、体にとって重要なたんぱく質にたとえられるほど極めて重要な心の栄養となるのです。

仲間と、道具や知識や体験をともにもつことが、社会的な人間として勤勉に生きるための必須要件であるというエリクソンの教訓は、小学生時代の子どもへの豊かな生き方を指し示す名言であると思います。

2. 思春期の子ども

■人の目を通して自分を見つめる

思春期の子どもの特徴の一つは、幼児期の「自分だけの世界」から学童期を

通して徐々に、自分を客観的に見つめるようになることです。

幼児は、「大きくなったら、新幹線の運転手になりたい」と思えば、「きっとなれる」と思います。それが、小学生の高学年から中学生になると、子どもたちは他人の目を通して自分を見つめようとしします。

思春期の子どもは、まず自分の姿がまわりの人の目にどう見えるかに心を奪われます。小学校の低学年の頃に比べて、鏡をよく見るようになり、髪型や服装が気になり、スカートの丈やズボンの太さを気にし始めます。

同時に、思春期の子どもには、「本当の自分」を客観的に見ようとする心が働いて、「社会の中で自分は何なのか、自分は何にむいているのか」を知ろうとします。そして、自分の言動や能力に対して他人がどのように見ているかということに大きな関心を寄せます。すなわち、仲間や先生の目に自分がどのように映っているかということを確認めながら、「自分」を知ろうとします。

そのために、思春期の子どもは友達を目を非常に気にし、仲間の評価を大切にします。先生の評価にも神経質になりますが、それよりずっと級友や仲間の評価の方を重要と思うのが思春期の心理の特性です。

したがって思春期の子どもは、友達や仲間を選び、限られた友達との友情を互いに深め合っていきます。趣味や、ものの見方・考え方が似ている友達と親しくなり、好意的な評価や感想を交換し合って、集団や社会に耐えうる自分を作りあげていくようになります。小学生時代、大勢のいろいろなタイプの友達と交際していたのが、思春期になると徐々に仲間を選び合うようになるのは、社会になじんでいくうえでごく自然なことなのです。思春期の子どもが、クラブ活動に熱中したり、長電話をしたり、夜を徹して語り合ったりするのは、思春期の健全な特徴です。思春期には、このような親友なしには、安定した自分を実感できない時もあります。ものの見方・考え方や気の合う友達との交流があって初めて心が安定する時期なのです。

■思春期の一人ぼっち

不登校の状態を念頭において、思春期にいたる心の発達を考えてみますと、幼児期からの友達との遊びや学習の重要性が分かります。

人間はだれでも、社会的集団から受け入れられることで社会集団に参加しているといえます。また同時に、人間はだれもが社会の一員であることから、他

の人間を受け入れる働きをしています。他から受け入れられていることと、他を受け入れていることの強さは人によって違いますが、その違いは、それぞれの人間がどういう育ち方をしてきたかにかかわっています。

自分が、周囲の人たちから認められ受け入れられているということと、自分も周囲の人たちを受け入れているということの実感がない時、人間は孤独になります。それは、個人の知識や技能の有無や多少とは、直接には関係のないことなのです。たとえ優秀な学力をもっていて先生から認められていても、友達や仲間の少なくとも何人かが、人間的な魅力やよさを認めてくれないと、その子どもの心は満たされず孤独感から逃れることはできません。学級で学力が一番優秀であっても、学校集団になじめず孤独に苦しんでいる子どもは、今日、少なくありません。

思春期は、もっともクラブ活動に熱中できる時代であり、仲間との活動が必要な時でもあります。自分を変えていくことに多くのエネルギーを費やす若者も、集団でオートバイの暴走を繰り返す若者も、コーラスやスポーツに熱中する若者も、その心理には共通したものがあります。

3. 未然防止のために

■ 1. 人間関係の量をふやして

不登校の状態にある子どもたちは、それぞれが個別の理由や原因を複雑にもっていますが、一方、ある程度共通している問題もあります。

そのような子どもたちの多くは、学校に行きたくないと思っているわけではありません。むしろ、学校に行きたい、あるいは、学校に行かなければならないと強く意識しています。それにもかかわらず登校できなくて苦しんでいるのです。そして、その苦しみが、いらいらや不眠、強迫、暴力など、さまざまな情緒的混乱や神経症的兆候を引き起こしています。

学校に行かない、あるいは行けない理由として、級友の中で安らげないこと、くつろげないことをあげる子どもが多くいます。ひどく緊張したり、逃げ出したいくなるような違和感や圧迫感を感じたりすると訴える子どもも少なくありま

せん。学校や教室の中に自分の居場所を見つけることができない子どもは、学校場面以外のところでも、家族以外の人と親しく安らいだ気持ちで接することができにくいようです。

そうになってしまう原因の重要なものとして、幼少期からの人間関係の量が不足していることが考えられます。さまざまな人間関係についての練習の機会が足りないまま年齢を重ねているといえます。

■ 2. 仲間との遊びを多く

子どもに限らず人間は、人間関係の中で共感という最も人間的な感情を体験します。「感動は、人間関係の中でしか経験しえない」と言ったのは、神奈川県にゆかりの深い評論家の小林秀雄氏ですが、一方、ストレスを感じるのも人間関係の中にあると思います。ということは、人間の精神保健にとって最も意味深い共感や感動も、精神衛生上最悪のストレスも、どちらも人間関係の中で体験することになります。

そこで、どのようにすると、人間関係の中で安らいでいられるようになるか、あるいは緊張よりも共感を感じることができるようになるか、考えてみる必要があります。

初めにビィゴツキー等の子どもたちの集団遊びの例(電車ごっこ)の報告を紹介しましたが、仲間と役割を分かち合って生き生きと遊ぶという体験は、非常に重要です。仲間との社会的集団の中で、協調し合いながら、それぞれが自分のあり方を確かめ、考えを主張し合う体験が必要なのです。

集まった仲間の顔ぶれと、その場の雰囲気や約束ごとを肌で感じ、理解したうえで、仲間との調和をできるだけ乱すことのないようにふるまいながら、感動と興奮を感得するというのが、遊びの醍醐味でしょう。このような遊びを十分に体験することが、集団の中での心の響き合う会話や付き合い、安らいだ状態で自分を生かすことに結びついてきます。

子どもにとって最も感動的な状況とは、おそらく仲間や周囲の人との共感的な調和の中で、自分をうまく主張(自己実現)できる時でしょう。たとえ激しい攻撃的なスポーツに熱中している時であっても、この原則は変わらないと思いま



す。

■ 3. 親戚や近隣との交流を深めて

子どもが仲間との遊びの中で、このように生き生きと調和しながら活動できるようになるには、同時にもっと他の人たちとのさまざまな人間関係を体験し練習しておかなければならないでしょう。

先に述べたように、一般に現代っ子たちにとって、人間関係の質より人間関係の量が不足しているようです。そこで、子どもたちは、もっと親戚の人たちや地域社会等の近隣の人たちと日常的に交流し合わなければなりません。たとえば、おじやおばといった親戚の人たちとの交際を積極的にすることが考えられます。できるだけ幼い時から、いとこたちとの付き合いを続けておくことがよいでしょう。いとこ同士だと、年齢や性が違って、交流が自然にできるからです。おじやおばに対しても、親に対するほどではないまでも、気を許し合うことができ、まったくの他人と人間関係をもつよりも気がねや緊張がなくてよいでしょう。おじさんの家族に連れられて海水浴に行くとか、おばさんの家族と遊園地に行くとか、夏休みに親戚の家に泊まりがけで遊びに行くとかいう経験が大切なのです。また、一人で行けるおじやおば、いとこのような家庭がいくつもあれば申し分ありません。

これと同じような付き合いは、親戚ばかりではなく、地域の近隣家族との付き合いも考えられます。友達に連れられて、たびたび、スキーや温泉に行くという付き合い方は素晴らしいと思います。

このような付き合いから生まれる効果は、自分の家族ばかりでなく、いとこや近所の家族にも同じように生じるわけです。ですから、家族が、親戚の子どもや近所の遊び仲間を連れて、ハイキング、映画、音楽会、ナイターなどに行ったり、あるいはまた、他家族との合同旅行やレジャーなどを実行したりすることも、さまざまな人間関係づくりを楽しみながら練習することができるという点で勧めたいのです。

私たちは、今日、このような他の家族との人間関係を楽しむどころか、わずらわしさや気苦労で避けがちです。また、家族のきまりきったような気安い生活や余暇活動でしか楽しもうとしなくなっています。このような家庭生活の傾向も子どもの不登校を引き起こす一因になっているといえます。

■ 4. 「自分から進んでやること」を見守って

不登校の子どもを見ると、級友やクラブ活動の仲間の中で、主体性と協調性のバランスがうまくとれないことがあります。

多様なタイプの友人と共感的な対話をするのがへたなのです。仲間の中で自分の考えをうまく伝えたり、主張したり、相手の発言に臨機応変に応えたりして対話を楽しむというようなことが苦手で、気づまりさえ感じて逃げ腰になっていることがあります。また、自分で、そういう事態をどのようにしたらよいか分からなくて混乱を続けることが多く見られます。

そこで、子どもに、自分とはいったいどういう人間なのかということを考えながら成長するように育てることが重要になってきます。子どもに対して、まわりの大人は、どのように生活すべきかを指示し過ぎないようにすることが必要です。

子どもは、ふだんから「自分はこんな時にはどう考え、どう主張して、どのように行動する人間なのか」ということを、多様な人間関係の中で学習し自覚を深めておくことが大切なのです。

不登校の子どもは、しばしば「自分はどう感じ、どう考え、どのように行動したいのか」という前に、「何をどうしなければならないか」ということを感じ過ぎて、自分を見失っていることがあります。子どもは、本来、自分の感じるままに、自分の意志や意欲の向くまま積極的に行動し思索するものであり、その機会が十分に与えられて成長していくものであることを、親や教師はあらためて知るべきです。

自分の感じるままに、自分の意志のままにということが、友達や周囲の人とどのようにすれば調和し、共感し合うのかということ、遊びやスポーツや勉強等の十分な人間関係の場で体験的に学習をしなければならないわけです。子どもに限らず、人間にとって最も生き生きとした自己実現の状態を自覚できるのは、主体性をもちながら自主的に、そして人々と共感し合いながら協調して生きている時でしょう。

■ 5. 子ども一人ひとりの「よさ」を認めて

人間は皆、一人ひとりが個性的な存在です。子どもにあっては、なおのこと個性的に生きられれば、ますます生き生きと輝いてくるのです。

子どもが、かけがえのない自分らしい長所に運よく気づけば幸いですが、そうでなければ、親や教師は、それを発見してやらなければなりません。自分の「よさ」を自覚できないで苦しんでいる子どもがいれば、それは育児や教育の不備の結果であり、親や教師の怠慢であるといつてよいでしょう。

子どもは、幼児期から少年期にかけて、仲間や友達との遊びや生活を、他からの干渉なしに十分に体験することができれば、それぞれの立場を主張し合い、役割を期待し合って、皆相互に相手の長所と存在を認め合うことができます。しかし、最近の子どもたちは、そのように深い共感や理解にいたるほどの付き合いができないでいることが少なくありません。

周囲の大人は、子どもたちに、子ども同士で過ごすことのできる時間を十分に与えることが大切です。そのために家庭や地域や学校は、さまざまな配慮や協力をし合わなければなりません。

特に、学校では、仲間と「たより、たよられる」関係を保ちながら自分の位置をしっかりと自覚できるように手助けしてやりたいものです。さらに、教師が子どもの個性的なよさを認めていくなれば、不登校の状態に陥る子どもは少なくなるでしょう。

今日、子どもを取り巻く人々は、あらためて子ども一人ひとりのよさに共感し、子どもに対する多面的な対応をするよう求められているといえます。

(文責 高橋 健雄)

MIND ～ 子どもの心を育てるために

<http://mindsun.net>

Copyright 2005 Masami Sasaki

許可なく無断複製と配布を禁止します

※ B5用紙に設定されています。